

急速に下がる国債利回り

皆さんが銀行に預けている資産がどのように運用されているか知っているだろうか。銀行によって違いがあるので一般化して言うことはできないが、それでも多くの銀行は大量の国債を購入している。

デフレの中でも、銀行に預けられる預金は増え続けてきた。正確には、デフレだったから預金が増えてきたと言っべきだろう。株式や投資信託などにお金を回すよりは、銀行に預貯金をした方がよい。そう多くの人が考えたのだ。預金が大量に集まってきても、

伊藤 元重 構造開発研究所 東大教授 理事 総理

銀行はそれをすべて貸し出しなどに回すことができなかった。景気が低迷する中で、貸し出しが増えていかないので、銀行の預貸率(預金と貸し出しの比率)は下がっていく一方であった。

この欄で何度も述べてきたように、日本経済全体としては非常に危険なことが起きている。政府の

ば、0%近い金利で預金を集めて、1%前後の金利がつく国債を持つていけばよかつたといつのは、ずいぶんと手間のかからない商売のような気もする。

銀行が融資するときには、取引先のリスクや可能性をしっかりと調べて、預金者から集めた資金を投じる。それなりの専門性が求め

大胆緩和で銀行は変わるか

借金は膨れ上がるばかりである。金融機関は膨大な国債を保有している。もし国債価格が暴落すれば、金融機関は大きな損失を被るようになる。

そうした指摘を受けても、金融機関は国債を購入し続けるしかなかった。多少皮肉な言い方をすれば

って、こうした動きに変化が見え始めている。日本銀行が大量の資金を投じて長期国債を購入すると長期金利は大幅に下がることになる。黒田東彦新総裁のもとで大胆な金融緩和策が発表されてから、長期の国債利回りはこれまでも増して低い水準になっている。

積極投資への動き期待

これだけ金利が低いと、預金を預かって国債で運用するといつた

けのビジネスモデルでは通用しなくなる。銀行ももっと頭を叩いて、汗をかいて、リスクを見ながら積極的に資金を活用する必要が出てくる。融資先の経営状況や将来性を見極める能力を持った職員をしっかりと育成し、新しい融資の手法なども開発する必要があ

る。また、ベンチャービジネスを育てるような取り組みも必要となるだろう。

日本銀行がいくら金融緩和しても、銀行などの金融機関の行動が変わらないかぎり、日本経済が元気になるのは難しい。日本銀行が供給した資金が銀行に滞留していたのでは、経済に本当の意味で資金が循環したことにはならないからだ。

日本には潤沢な資金があるが、本当の意味でのリスクマネーが足りないと言われてきた。リスクを選別しながら、積極的に投資をする資金である。デフレ脱却が進んでいけば、金融機関の行動にも変化が出てくるだろう。そうした動きが早く日本全体に広がっていくことを期待したい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。